わが心の浜松

昭和54年

現在のまちなか形成の原点

浜松駅の高架化工事が完成

「東海道本線と浜松駅の高架化が完成したのは昭和54年(1979年)10月。駅が高架になったことで、浜松のまちは見違えるほど立派に整備されるようになりました。現在のまちなかの形成は、この時始まったと言っていいでしょう」。浜松の郷土史に詳しい歴史研究家の神谷昌志さん＝写真＝は、そう語ります。

浜松駅を中心とする全長5・33キロを高架化する工事は、昭和47年(1972年)3月にスタート。工事期間は7年、費用は257億円というビッグプロジェクトでした。

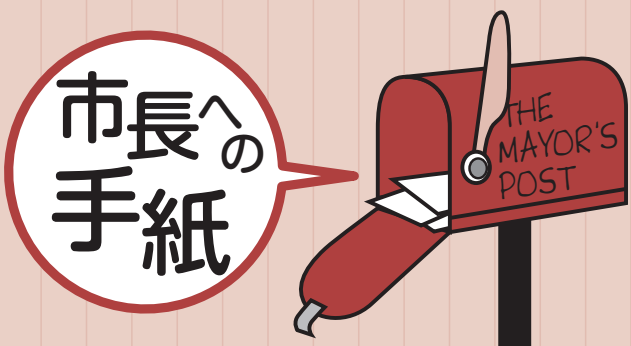
「きっかけは昭和39年(1964年)に東海道新幹線が開通し、浜松駅にも停車するようになったこと。これに伴い、まちの活性化のため駅を高架にしようという機運が盛り上がりました」。

当時、浜松のまちは駅と線路によって南北に分断され、北側の中心街から南側へ行く通路は、鍛冶町か松江町の狭い地下ガードしかありませんでした。また、平田町には通称「平田の踏み切り」がありましたが、ここは貨物列車が頻繁に往来し、「開かずの踏み切り」として有名。こうした南北往来の不便さが地域間の格差を生む要因となっていたのです。

「高架化は慢性的な交通渋滞や地域格差を是正するため行われたわけですが、これによって駅舎が200メートルほど南へ移動したのをご存じですか?昭和47年まで旧浜松駅は今のバスターミナル付近にあり、駅のすぐ北側は板屋町の商店街。そこから、新幹線ホームに合わせて駅を南に移動させたんです。移動前、そこは新豊院(しんぽういん)という大きなお寺の敷地でした」。駅の移動によって北側に広々としたスペースが生まれ、そこにバスターミナルや北口広場のほか、百貨店などの建物が次々に誕生。また開発が遅れていた駅南にも、近代的なビル群が形成されるようになりました。

「もう一つ、高架化をきっかけに大きく変わったのが駅の東側。かつて、その場所は旧国鉄の広大な貨物駅でしたが、貨物駅機能は森田町に移転し、跡地を浜松市が取得しました。この跡地に建設されたのがアクトシティ浜松というわけです」。まさに「まちなかの原点は高架化にあり」と言えそうです。

高架化された浜松駅を浜松郵便局の屋上から見た風景。手前で現在の浜松駅北口広場の整備工事が行われている(昭和54年ごろ)



子育ては自分肯定から始めよう

「市長への手紙」コーナーに数多くの手紙をお寄せいただき、ありがとうございました。今回は、その中から市内在住のSさんからのお便りを紹介します(誌面の都合で内容を一部編集しています)。

近年の子どもたちは「自分が好きでない」子が増えています。子どもたちの自尊感情の低さは、いじめ、不登校、性行動の低年齢化につながるもの。自尊感情は生きる土台であり、子どもたちには、その子の心を生かす教育が必要です。では「心を生かす」とは?わたしは「自分が好き」と自分肯定から始まり、そこから「自分が大事だからほかの子も大事」と、思いを派生させていくことが「心を生かす」ことだと思います。

また、子どもの自尊感情を高めるためには「あるがままを受け止める」ことも重要。でも、それは簡単なことではありません。わたし自身、日々の子育てでイライラし、声を荒げることがあります。ではどうすればいいか?わたしは、子どもだけではなく、子育ての中心にいる母親(受け止める側)の自尊感情も大切だと思います。「受け止めてあげたい」と思っても、それができない母親。頑張りすぎてしまう母親。夫の協力が得られない母親。母親自身の自尊感情が低いため、こんなふうに歯車が狂ってしまう場合もあるのです。そんな母親の心に焦点を当てていただけたらと思いました。

子育ての悩みが尽きない中、今こそ子どもたちを本来の姿に戻していく時だと思います。それには長い年月がかかるでしょう。でも、あせらず変わっていく未来を楽しみにしたいです。そして、いつの日か、浜松市が「自分大好き!」な子どもの最も多い都市になればいいな、と思っています。

(「小学校、中学校の教育」をテーマに、市長への手紙を広聴広報課まで郵便でお願いします。字数は600字程度。匿名でも構いません。あて先は裏表紙に記載。締め切りは平成21年2月13日)

※当コーナーへ寄せられた主なお手紙は次回の誌面で紹介させていただきます。なお、個別に回答はいたしません。

特集タイトルの由来

ウィリアム・スミス・クラーク博士
Dr. William Smith Clark
(1826〜1886)

「Boys, be ambitious」
(少年よ、大志を抱け)

米マサチューセッツ州生まれの植物学者で、1876年(明治9年)7月からおよそ1年間、札幌農学校(現北海道大学)教頭を務めました。有名な「少年よ、大志を抱け」の言葉は、離日をひかえ、札幌農学校第1期生との別れの際にクラーク博士が語ったとされています。教育の将来を考える時、この言葉は今もなお、わたしたちの心に強く響きます。